

情報文化学会における諸活動の方向性

A direction of activities for Japan Information-Culturology Society

片方 善治*

要旨

本稿は創立10周年を迎えた本学会における将来活動について、目ざすべき活動の方向性、学会誌の新路線、支部活動のあり方、将来のあるべき姿などを提案したものである。

Zenji KATAGATA*

1. 人類貢献の場としての情報空間の構築へ

本学会は会員各位のご支援によって、順調に発展している。2001年10月28日には、東京・水道橋の尚美学園バリオホールにおいて、“VIVA！ JICS！創立10年記念フェスタ”を開催することができた。改めていうまでもなく“JICS”は、本学会の英文名Japan Information-Culturology Societyのイニシャルによる略名である。

このときに発行した記念ブックレットにおいて示した会長としてのメッセージ「人類の情報文化学に向けた学会活動をめざして」^[1]が契機となって、中日新聞編集局文化部より寄稿の依頼があり、人類貢献の場としての「空間」構築へという内容を『情報文化学への誘い』というタイトルにしてまとめたところ、2001年11月26日の掲載となった。同新聞と提携関係にあるということで、東京新聞、北海道新聞、西日本新聞にも掲載されたが、予想以上の反響があり、本学会の周知と啓蒙に役立ったことを喜んだ次第である。

本学会の目ざす方向が、情報学の立場に立って人類の文化に寄与しようとしているところであると述べておいたが、本稿の目的である将来活動の方向を示しているので、以下に後半の一部を転載し参考に供したいと思う。

情報文化学という新しい学問の名前は、わが国において提唱されたものだが、文化学（カルチャロジー）という個別の文化を大きく束ねた学問は、既にアメリカにおいて提唱されていた。

この文化学とは従来、分野別に研究されていた社会学、言語学、民俗学、人類学…などを一つに束ね、人類の文化という立場で研究に取り組もうとする新しい学問である。

21世紀に向けて、情報文化学会が目ざしているのは、前述の三つの複合領域（情報学、社会学、芸術学）の学際的な研究からさらに一歩進み、情報学と文化学を融合させることである。つまり、情報学の立場に立って、人類の文化に寄与する学問の体系化に取り組もうと、志を立てているのである。

テロの恐怖におびえながら生きている現代は、果たして文化の時代と言えるのであろうか。ニューヨークの同時多発テロから炭疽菌のバイオテロへとテロが横行するいま、さらに今後はコンピュータウイルスの拡散や集中ハッカーの同時進行などのサイバーテロが予想される。



このサイバーテロへの対策については、情報文化学が寄与するところが少なくないと考えている。情報文化学の構造は、理念系、人間系、施設系の三つの軸で形成される。

* 情報文化学会 会長

人類の幸せを求める理念系、人間尊重のパラダイムによるヒューマンウエア（人間系）、それらの道具立てに必要なハードウエア（施設系）の三つの軸によってつくられる情報文化空間こそ、情報文化の“場”でなくてはなるまい。

21世紀は、世界の地域や国家がそれぞれの文化や文明を主張しながら共存する多極構造の時代である。このような新しい時代にどう対応すべきか。数々の対応策はあるが、長い目でみれば、情報学の立場に立って人類の文化に寄与しようとする情報文化学は、さまざまな面で貢献するところが大きいのではないかと、ひそかに思っている。

近代の文明は部分と分析を重視した解明によって開花した。その成果は高く評価しなければならない。しかし、その行き過ぎを反省せずに、全体の把握を軽視したことが、現代の諸問題を生じさせたといえることができる。この事実を凝視し、本学会は問題解決のために知の再編成に取り組み、人類貢献の場としての情報空間構築の基盤となる学問の一翼を担うべきであると考えます。

2. 学会誌の充実に向けて

情報文化学会誌第8巻第1号の巻頭言^[2]において提案した内容に対して、会員各位から感想と意見をいただいた。これをもとに、編集委員長と打ち合わせを行い、学会誌の編集について、次のような提案をさせていただく。

第1は、従来の掲載は査読結果により、研究論文、研究報告、研究資料と分けていた。この分け方は、投稿規定の編集方針に示されている「学術的發展に資する考察があること」という条件を満たしているか否かによっている。この場合の「学術的」とは何かという問い合わせが産業界の会員からあったので、ここで次のように見解を明らかにしておく。

学術は一般に学問と芸術を意味する言葉として理解されている。ここから、産業界における問題をテーマとしての研究は、学術的發展に資するという点で不利でないのかという疑問が生じたよう

であるが、その研究のテーマの意義および正当性によって、十分に学術的發展に資するものとして受けとめることを明らかにしておく。産業界における事例研究なども、その意義の正当性や論文内容の優位性が、他との比較検討などによって示すことができれば、研究論文として認められることになる。

第2は、学会誌の発行が現在は年度内1巻として（2000年度は第7巻1号および2号として2巻発行）が、今後はできるだけ、年度内2巻の発行ができるような方向を旨としたい。大学や研究機関からばかりでなく、産業界の方々からの投稿とともに、多数の論文が寄せられることを期待している。

最近、会員以外から学会誌の頒布を希望するケースや書店において購入できないかなどという問い合わせがあるようになってきた。外部からの希望が多くなったときには、発行を出版社に委託してはどうか、などの提案も寄せられているが、今後の課題として慎重に検討してみる必要があると思う。

第3は、現在の学会誌は論文のみとなっているが、会員各位に親しみのある内容にするために、研究室だより、書評、情報文化に関連するトレンドやトピックスなどを、巻末にまとめて掲載することとしたい。

論文にかたよらない学会誌にしよう、という趣旨は、既に第2巻の巻末に簡単に示していたのであるが、ここで改めて学会誌が会員各位に親しまれる内容にしていく方針を示し、誌面刷新に向けた会員各位のご協力をお願いする次第である。

3. 複数支部による“連合”研究会の開催

2002年度から始まった新しい学会活動に、複数支部による“連合”研究会の開催がある。将来はインターネットを活用して、複数の支部が統一テーマに対して討論を行うような“連合”研究会の開催が望まれるが、2002年度においては、二つの支部が統一テーマのもとにそれぞれ研究会を行い、その結果を“連合”としての研究報告にまとめるという方法をとることとした。

しかし、従来の学会活動である①全国大会、②マルチメディア研究部会、③伝統研究部会、④産業部会、⑤関東支部における研究報告に加えて、新発足した東北支部が関東支部と連絡し合っ、て、“連合”研究会という新しい方向を打ち出したことは、前述のような将来展望につながるものとして位置づけられる。

ちなみに、2002年度に開催された関東・東北支部連合研究会についてはホームページによって知らされたが、統一テーマが「情報文化学の方向性」で、東北支部が7月5日（金）に岩手県立大学ソフトウエア学部で、また関東支部が7月24日（水）に東京大学山上会館で開催された。

今後、次第に支部活動がさかんになるとともに、“連合”研究会のような各支部が提携し合っ、ての学会活動が行われていくことを期待するものである。

これまで学会は他の学術団体との交流を行ってきたが、今後は学会本部との連絡を密にしながら、それぞれの支部がその地域における学術団体や地域団体と提携して活動を展開することについても期待を寄せたい。他の学会が本学会との連携を望んでいることについては後に述べるが、支部同志のネットワーク、また支部と他の学会支部などとのネットワークによって、本学会が新しい活動を進めていくことを検討していただきたいと思う。

4. むすび

情報文化学会は新しい世紀における情報文化の重要性を予知し、知の再編成としての情報文化学の体系化を目ざして設立された。創立以来10年の成果の一部は「情報文化学ハンドブック」^[3]として記念出版することができたが、数年後にはさらに充実した内容の第2版を刊行したいと考えている。

今後の学会活動に対して、日本社会情報学会の秋山穰会長は、「人類発展史上の文化史的意味・内容を理論的かつ実践的に解明する学会として、大きな社会的使命と期待をもって注目」^[1]していると述べられた。

また、東京大学社会情報研究所長の廣井脩教授は、本学会へのメッセージの中で、当学会を情報

関連学会の先輩格であるとして次のような期待を寄せて下さっている^[1]。

学会設立趣意書の中で片方会長は「情報文化という複合領域の学際的学問体系」という言葉をお使いになっていますが、この複合性、学際性こそが情報研究のキーワードではないでしょうか。そういう眼でいままでの情報文化学会大会のテーマをみますと、実に多面的で複合的。成長しつつある学問領域のエネルギーが伝わってくるようです。

この10年のあいだ、情報の人文科学的研究を標榜する学会がいくつか誕生しました。今後は、これらの学会のネットワークが必要であり、先輩格である情報文化学会がその中核となって活躍していただけることをぜひとも期待したいと思います。

このような学界からの期待に応えるとともに、産業界のご支援に対しても応えなければなるまい。本学会は創立時には財団法人セコム科学技術振興財団より支援を賜わり、またその後の運営には株式会社NTTデータをはじめ各社のご協賛をいただいて、今日にいたっているのである。

既に述べたように、10年にわたる路線の上に、さらに新しい活動を加え、今後ますますの充実と発展を目ざし、各方面からの期待に応えていきたいと切望している。ここに改めて会員各位の一層のご協力をお願いする次第である。

参考文献

- [1] 藤原博彦他（編）、情報文化学会・VIVA！ JICS！創立10年記念フェスタ・ブックレット、情報文化学会本部（2001）
- [2] 片方善治、情報文化学の新世紀、情報文化学会誌、Vol 8, No 1. (2001)
- [3] 片方善治（監）、情報文化学ハンドブック、森北出版株式会社（2001）